

わたしの戦争体験

鞍手郡若宮町 峯 みどり

私は神戸で生まれ、下山手通りにいました。女学校4年生、昭和19年3月18日夜9時頃、警戒警報のサイレンが鳴って隣組長さんが知らせに隣組内を回られる。電気の黒布を下して窓の黒いカーテンを引き、外に光が出ないようにする。バケツに水を入れる。父は、ラジオのスイッチを入れてニュースを聞きながら避難の用意をする。家族は5人で、妹は田舎に学徒疎開に行っていた。父母姉と4名で家にいた母は、夕食の残りでオニギリの用意をしながら各自救急袋に三角巾、包帯、火傷の薬等を入れたのを首に掛け、水筒等大きなリュックに缶詰、乾パン、乾燥サツマイモ、乾燥バナナを詰め込み、綿入れの三角帽子をかぶり、父母は大事な書類や先祖の位牌等を持ち用意をする。

父は、離ればなれになったときは県庁の近くのキリスト教会に避難せよと言った。父母は家の中を見回りこれが我が家の最後と思ったことでしょう。

空襲警報が鳴り響く。その時既に、B29は何十機頭上に来ていた。その時、また父は大声で「きっと教会へ行け」と言った。

焼夷弾が無数に『ヒューヒュー』と落ちて来た。

父は、繰り返し「教会へ行けよ」とさげんでいた。その声を後にして、姉と隣組の防空壕に飛び込んだ。無言のまま皆座っていたが、しばらくして「壕から外へ出ろ」と指示があったので、「互いに頑張りましょう」と励まし合って外に出た。

隣組の人々と離ればなれになった。道路に出ると避難の人々が大勢いて、家族や知人の名を呼びながら必死で山手の方へ急いでいた。

私も必死でした。その頃姉と離れてしまっていた。とにかく、父の指示通り教会へ向っていた時、後から見知らぬ人が来て、防空頭巾に火が付いているのを知らされて驚き、火をもみ消しながら走っていたが、なかなか消えないので水槽につけた。濡れ頭巾をそのままかぶって走り続けたが、涙が無性に出了。

とにかく教会に行かねばと父母、姉の姿を思い浮かべながら無我夢中に走ったが、教会の十字架が見えないので人に尋ねると反対の方向だった。

自身を励ましながら一生懸命走りました。すると、むこうの方に教会の高台に十字架がかすかに見えて来ました。安心し力が抜けたが、父の声を思い出して頑張って歩き出したが、途中で座り込み涙が出て仕方がありません。しばらくすると私を呼ぶ声がした。それは姉でした。「良かった。良かった」と抱き合って喜び合っていました。

間もなく教会の中に入りました。父母の安否を心配しながら我が家の方を見ていた姉は、しっかりしている。私を慰めるように、父母は家の焼けるのを最後まで見守っていると、父母が元気で無事にいるだろうと私を元気付けてくれた。防空頭巾が濡れているので寒くなり、

姉の頭巾と替えてくれた。

間もなく、大声の父が姉と私の名前を呼びながら、元気一杯無事な姿で母と二人でやって来た。母は涙ながらに「良く頑張ったね」と言って、一生忘れることのできない感激にひたった。

少し空が明るくなったので焼け跡の家にもどったが、跡形もなく焼けてしまっていた。床の下の防空壕の中に入れていた品物も全部蒸し焼きになっていた。先日用意した疎開すべき家具の品々も全部焼け、無一文となった。

父は、残念ではあるが家族全員怪我一つなく元気であったことが何よりだと、皆を元気付けてくれた。

父は、この次は会社の事が心配なので責任上急いで会社に行った。

荷物疎開のために用意したもので、運転手の弁当を作るために米麦の有りたけを仕込んでいたのが、熱によって御飯ができていた。母はそれをおにぎりにして隣組の方々に分け合って食べた。本当に喜んでくれて、皆一生忘れることのない思い出と言ってくれた。

住所を代わるたび空襲に遭う。

父は、故郷の福岡へ戦災で引揚げるべく決意しました。私も終戦後父の故郷へ行きました。都会の生活から一変して田舎の生活になり、耐えかねて何度神戸に帰ろうと思ったか知れませんでした。

九州弁も良くわからず、父が通訳になってもらって農業の手伝い等色々と苦勞の連続でした。

50年を振り返って見ると、子供も一応社会人として努力しているし、孫にも恵まれています。自分の趣味に日々を送って安らかな老後を送っています。

人生あざなえる繩の如しと申しますが、本当にそのとおりだと深く感じます。

戦争のない世の中でありませうようお祈り致します。

神戸の見舞に行ったところ、懐かしい教会は災害に遭っていました。

足が向く神戸の友よ懐かしや